

大学入試センター試験既出問題を利用した 共通被験者計画による 英語学力の経年変化の調査

(大学入試センター)

(立命館大学)

(関西大学大学院)

(東京外国語大学)

(愛知県立大学)

(呉大学)

吉村宰・荘島宏二郎

杉野直樹・野澤健・清水裕子

齋藤栄二

根岸雅史

岡部純子

サイモン・フレイザー

はじめに

- センター試験「英語」の受験者数は毎年50万人を超える.
- 18歳人口の約1/3に相当
- これらの層の学力の経年変化を把握することは、教育課程、教育方法等の評価という観点からも意義がある
- 学力の経年変化を知りたい
 - 過去のセンター試験のデータはある

ところが

- センター試験は，毎年，問題が異なる
 - 同じ問題が二度出題されることはない
- 受験者集団が，毎年，異なる
- 毎年の素点の平均点等は比較可能でない

- 複数のテストを相互に比較可能にするためには等化が必要.
 - 項目反応理論に基づく等化を行う

本研究では

- 大学1年生を対象にセンター試験の既出問題を利用した英語学力調査を実施することで、大学入試受験時点での英語学力の経年変化の実態把握を試みる

方法：調査用問題

- 等化のために作成した調査用テスト問題
 - 平成2~16年センター試験本試験「英語」
 - 各年度の第2問から計100項目
 - 50項目ずつの問題冊子(セットA, セットB)を作成(100項目は一回で実施するには多すぎる)

| 項目母数 | a | | b | | c | |
|------|------|-------|-------|-------|------|-------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD | 平均 | SD |
| セットA | 0.85 | 0.253 | -0.22 | 0.862 | 0.13 | 0.096 |
| セットB | 0.86 | 0.217 | -0.28 | 0.840 | 0.14 | 0.098 |

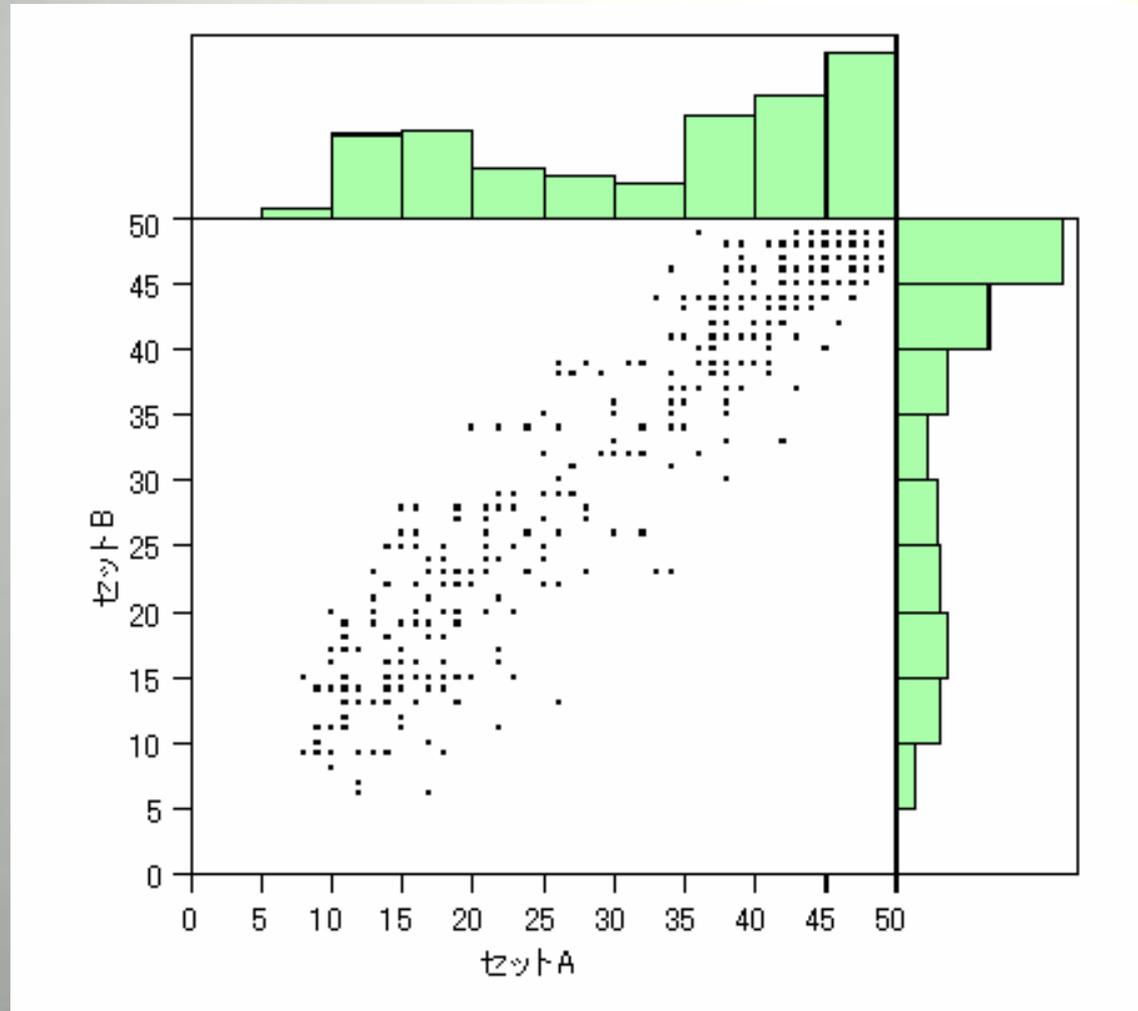
センター試験「英語」の第2問

- 文法問題
 - リード文なし、語彙、文法事項についての知識
- 和得点との相関が高い
 - 第2問ができる人は和得点も高い
 - 第2問ができない人は和得点も低い
- 基礎力と言える
 - 長文読解等には不可欠

方法：受験者・実施時期

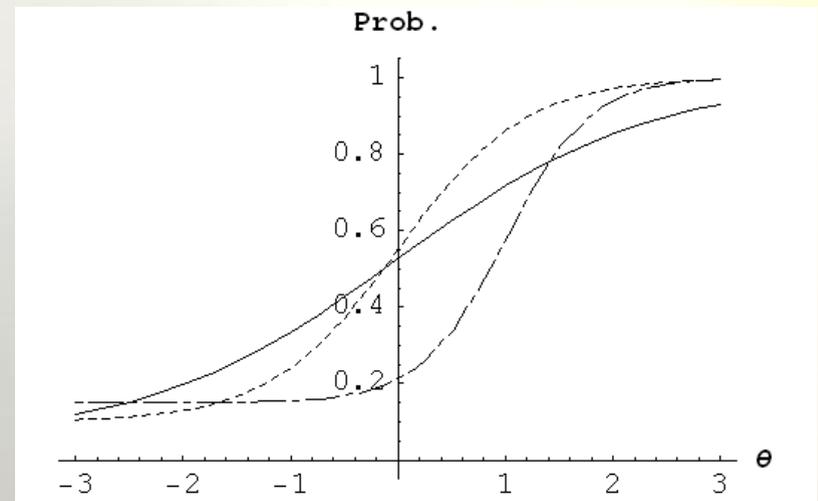
- 調査協力者
 - 4つの大学の1年生、計424名
 - 各人がセットA,B両方のテストを受ける
- 調査時期
 - 2004年5月～6月
 - 授業中

2つのテストの得点分布



用いた項目反応モデル

- 3母数ロジスティックモデル
- 項目の個性
 - 形を決めているのは項目母数
 - 識別力(a)
 - 困難度(b)
 - 擬似チャンスレベル(c)



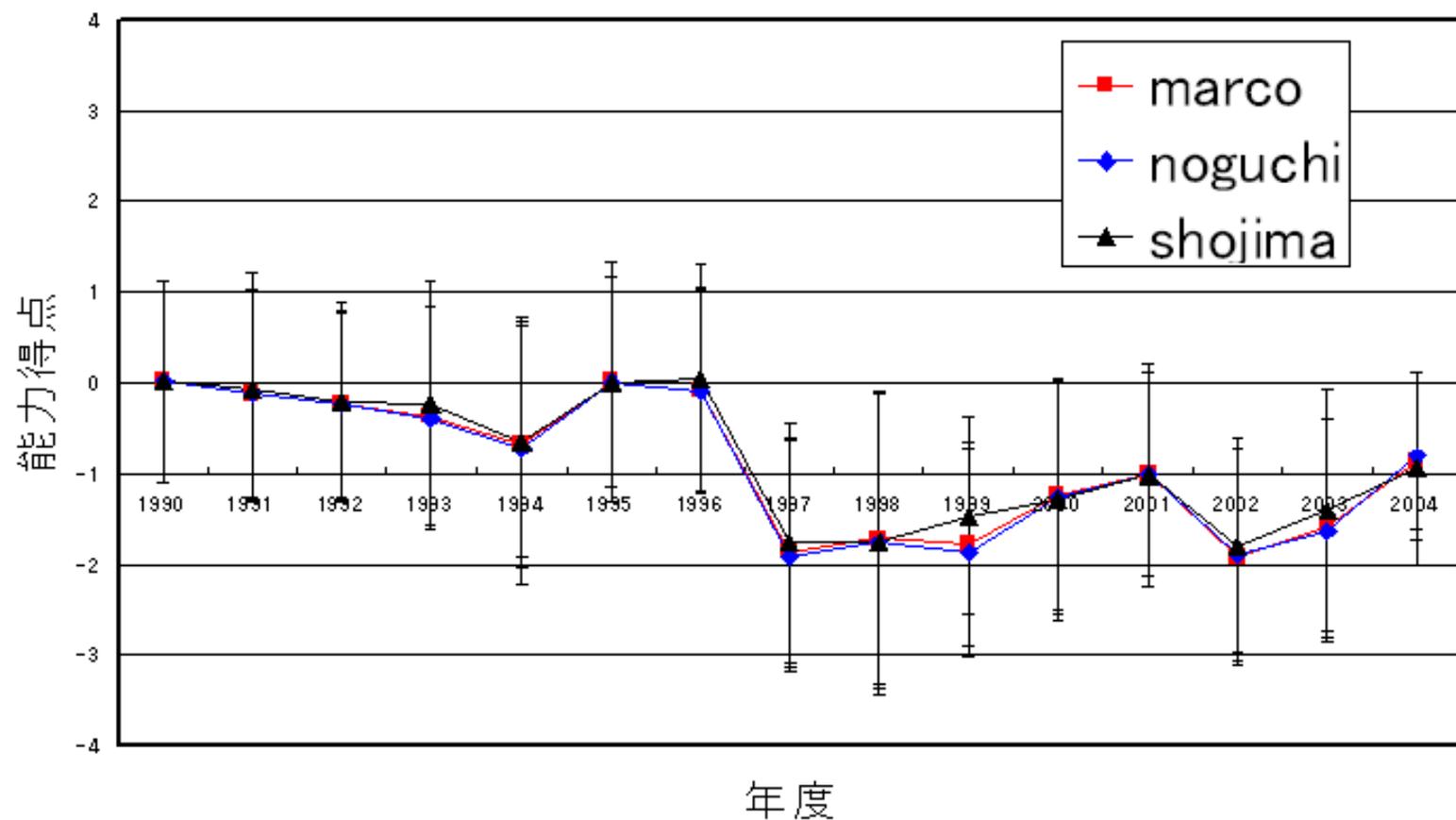
分析の手続き

- 等化デザイン
 - 共通受験者デザイン
- 等化法
 - Marco (1977)の方法
 - *Journal of Educational Measurement*
 - 野口(1983)の方法
 - 教育心理学研究
 - Shojima (2003)の方法
 - *Behaviormetrika*

結果

- 424名の共通受験者(調査協力者)を利用して等化を行った.
- その結果, 15年間の「英語」テストが比較可能になった.
- 各年50~60万人分の受験者の学力の平均値とSDの推移を得た.

各等化法にもとづく能力得点の年度別平均



特徴

- 1996年と1997年の間に急激な変化。
 - 受験者層の急激な変化はない
 - 1997年は当時の新しい学習指導要領(1989年改訂・1994年施行)のもとで学習した高校生がセンター試験を受験した最初の年

解釈

- 1996年以前の問題は、424名の調査参加者にとって難しかった
 - 1996年以前の問題の解答トレーニングをやっていなかった、という可能性
 - 1997年以降のセンター試験の受験者の学力が、それ以前に比べ低下している、という可能性

解釈 (続き)

- 学力が低下したかどうかについては軽々にいえないが・・・
- 昔の学生ができたことができなくなっていることは確実にいえる。
 - ただし、学力観の変化によって、昔の学生ができないことを今の学生はできるかもしれない。

おわりに

- 学力が低下していることを言うには証拠不足
 - ただし、十分に学力低下を疑うことができる。
- 等化の調査協力者424名が少ないかもしれないので、データを足していく必要がある。
 - 一般的には424名は十分とされているが、偏りが気になる
- さらなる検証を続けたい

本研究は、科学研究費補助金を受けています
(基盤研究(B)(1) 課題番号14380101)